

仙 台 教 区 報

発行所 カトリック仙台教区事務所
980 仙台市本町一丁目2番12号
電話〇二二二二二二七三七七一番
編集・発行人 三浦 平三

「贖いの特別聖年」の締めくくり

四旬節を 慈悲深い父のように

3月7日(灰の水曜日)から、今年の四旬節がはじまった。私たちは主キリストのご受難・ご死去の贖いのみ業を黙想して、ご復活のよろこびを準備する。今年4月22日が復活祭で、昨年3月25日に始まった「贖いの特別聖年」はその日に終る。今年の四旬節は、いわば特別聖年の締めくくりの機会になり、いっそう深く四旬節精神の実践がもとめられることになろう。

生きた信仰を示す四旬節

カリタス・ジャパン四旬節メッセージの中で、担当の佐藤千敬司教は次のように述べている。

特別聖年の成果は？

昨年6月29日のカテドラルの特別聖年司教ミサを頂点に、教区各地でこの一年間さまざまな聖年行事が催され、多くの信徒が聖年のお恵みに与った。司教はとくに、贖いのお恵みを感じるとともに、贖われた者の責任、つとめを深く考えてほしいと訴えた。特別聖年の終りが近づいたいま、私たちはもう一度このことを反省する必要がある。果して私たちは、贖われた者の責任を意識しているだろうか。またそのつとめを具体的に実践した

だろうか。これらは四旬節の黙想そのものでもある。締めくくりのこの機会に、堅い決意をもって実践につとめよう。

「贖いの特別聖年の締めくくりにあたる今年の四旬節の期間は、神の慈しみを一層深く味わいながら愛の業に励むときでしょう」

「この四旬節には特に、数多くの『貧しい者・キリスト』のために、『慈愛深い父』のようになっていたいただきたいのです」

「四旬節の祈りと犠牲と献金が、キリスト者の生きた信仰と希望のあらわれとなりますように」

3月25日 家庭の日

教皇庁は昨年、家庭評議会を新設したが、教皇は今年の3月25日を、「聖年家庭の日」と

された。特別聖年の意味するものが、家庭の福音的刷新とキリスト教的養成の課題を、実践に移すよい機会と考えたからである。一昨年の教区司牧目標は、「家庭にキリストの平和を」ということだったが、目指すところはどちらも真の福音的家庭をつくることにほかならない。3月25日は教区行事として、カテドラルで家庭の日司教ミサがささげられるが、各小教区においてもその日のあたりに、何かの行事を行うことがのぞまれている(昨年9月の司牧評議会申し合せ)。また、信徒への具体的な働きかけもぞまれよう。家庭聖化は、教会のあらゆる活動において活発化のみならず、最重要事項である。

司 教 日 程 (2月20日現在)

- 3月2日 カリタス・ジャパン、中央協議会 財務委員会(東京)
- 3月5日 教区司祭団役員会(仙台)
- 8日 常任司教委員会(東京)
- 9日 社会司教委員会(東京)
- 12日 仙台司教区司祭評議会(仙台)
- 13/15日 姫路難民キャンプ視察
- 18日 仙台司教区司牧評議会(仙台)
- 20日 司祭・助祭叙階式(盛岡・四ツ家)
- 21日 人権福祉委員会(東京)
- 25日 「家庭の日」ミサ(元寺小路)
- 26日 教区司祭団月例会(仙台)
- 27日 聖母愛真会理事會(福島)
- 4月1日 YBU聖書展(仙台)
- 2日 教区司祭団役員会

ステファノ 小野忠亮 神父

2月15日 スベルマン病院で帰天



父が小野神父のためにミサを捧げている最中であつた。

意外なほどの病気の

小野忠亮神父はさる2月15日午後1時35分に、入院中のスベルマン病院で死去。最終の病名は肺ガンであつた。七十八歳。

三年前、一関教会主任を最後に第一線を引退、青森市藤ホーム付として霊的世話と著作の日を過していた。昨秋、風邪から体調をこ

わし、11月16日にスベルマン病院に入院。だいぶ疲労の様子だつたが、しばらくの安静で回復するものと周囲は信じた。しかし年が明けても病勢はつるばかりであつた。自分でも死期の近いことを知り、親しい人に会い、すずんで病油の秘跡を受けた。2月15日すべてを終えた安堵からか病状は急変し、午後1時35分、小林有方司教に手をとられ、島田実神父、令兄小野忠正氏、三浦平三神父の祈りのうちに、大野主治医の手当も空しく息を引きとつた。病院隣りの東仙台教会で、平田浩神

3月20日は 司祭叙階式



仙台教区板垣勤神学生(花巻教会出身)の司祭叙階、ならびに佐藤修神学生(野田町教会出身)の助祭叙階は、来る3月20日(春分の日)午前11時より、盛岡市本町二丁目岩手カトリックセンター・四ツ家教会において、教区长佐藤千敬司教の司式で行

進行や絶対安静の配慮に過ぎたため、各方面への知らせが遅れてしまつたが、故神父の令姪が世話を尽され、また令兄が臨終までの一日を共にされたことなど、故神父には大きな慰めになつたことであらう。

カテドラルで盛大な葬儀

遺体はその日の夜、カテドラル元寺小路教会に運ばれ、17日午後7時より佐藤司教司式の通夜ミサ、翌18日午前11時より葬儀ミサが行われた。温厚だつた故神父を慕う信徒や修道女が教区内外から集まり、聖堂を埋めた。教区长佐藤司教が主司式者、小林有方司教をはじめおよそ50人の司祭が共同司式で故神父の永遠の安息を祈つた。説教は小林司教、かつての上長者として、古い友人として、神の取りつぎ者を送る思いを述べた。

われる。仙台教区の神の民にとつて大変よろこばしく、また心づよいことである。この両名が神の召命に忠実にしたが、司祭職を全うすることができるように、心をこめて祈らう。

二人の受階者は多くの方々の祈りと協力に感謝し、みことばの宣教と奉仕に精いっぱい働く決意を表明している。

引き続き行われた告別式では、キリシタン研究で結ばれたチースリク神父、藤聖母園の本田守男氏、気仙沼教会信徒会長菅原隆蔵氏が弔辞を述べた。また作家の田中澄江さんなど死を悼む約70通の弔電が寄せられた。葬儀の終りに、全司祭が遺体を囲んでサルベ・レジーナを歌い、聖母に祈つて最後の別れをした。遺骨は同夕方、仙台市鶴ヶ谷カトリック墓地に埋葬された。

キリシタン 史家小野神父

一九四一年(昭和16年)司祭叙階を受けた故小野神父は、豊屋町教会助任からスタートして青森県下、函館、宮城県下の諸教会を歴任、叙階記念日(2月16日)前日の逝去まで満四十二年間の司祭生活であつた。宣教司牧のかたわら、キリシタン史、教会史の研究にも力を注ぎ、北日本カトリック教会史、青森県とカトリック(宣教百年史)、キリシタン文化研究シリーズ・フォリー神父、等の著書がある。ただ念願だつた津軽キリシタン史の完成を見なかつたことは、きわめて心残りだつたにちがいない。

故神父はまた俳句を趣味としていたが、

みじめさに徹して仰ぐ、寒の星

を1月17日に作つてゐる。すべてをささげつくしての辞世であらう。

ご母堂も90歳以上の長命だつたと伺つてゐるが、昨年亡くなられた令姉はるゑさんも86歳であつた。現在、長兄忠正氏、次兄忠明氏(版画家)、弟正弘氏(画家)が存命である。

明後年は 教区創立50年

司祭評・司牧評で議題に

来る3月12日に教区の司祭評議会が、また同18日には司牧評議会が開催される。先日それぞれの役員会で議題の準備を行ったが、その中で両評議会に共通したものととして、明後年に予定されている教区創立50周年の記念行事を取り上げられている。主な点は、①仙台教区全体を対象にした信徒大会、あるいは教区大会の開催に関するもの②記念行事をその時だけのお祭りにしないために、明後年を目標になにか実際のな運動を展開してゆくことの二つである。両評議会ですべての具体的なことが決定され、50年の教区伝統にふさわしい活力が生まれることを期待しよう。

教区カテキスタ会

一関で研修会・総会を開く

仙台教区カテキスタ会の研修会・総会が、さる1月16日から18日までの3日間、一関市巖美の溪泉閣で開かれた。

参加者は5人の司祭を含めて24人。研修テーマは、「聖書における聖パウロの思想」。ペトレヘム外国宣教会管区長ツゲル神父が講師で、聖書、とくに聖パウロの書簡を理解するために、その歴史的背景、聖パウロがどんな考えをもっていたかなどを学習した。これらは教理指導を行うカテキスタにとって、貴重な学習になった。

総会では役員改選を行ったが、会長阿部輝

雄、副会長横尾重信、監事新松義男、庶務会計加美山恵子の全役員を再選した。今回の研修会・総会は福島地区が担当する。

聖ウルスラ学院に

新聖堂

宗教教育に大きな力

仙台市一本杉の聖ウルスラ学院中学・高校校舎に、新しく聖堂が設けられ、さる1月27日午前11時より司教総代理三浦平三神父が聖堂祝別とミサを行った。当日は聖ウルスラ修道会の創立者アンジェラの祝日。田原武校長は、「これで念願の学校の中心ができた」とあいさつし、祈りを中心にしたカトリック学校の雰囲気づくりの決意を見せた。

新聖堂は校舎西側四階の一室を改装したもので、広さは一五〇平方メートル、百人以上が利用できる。ケベック外国宣教会カロン神父が基本プランを考え、落着いた設計になっている。特色は西側壁面にはめ込まれた、聖女ウルスラと12人の伴侶を画いた油絵の大作で、東京の大久保豊せん氏の作品。生徒たちの宗教的情操教育に、大きな成果があることを期待される。

一関・千厩で

浜尾 実氏の教育講演会

鷹嘴達衛神父が主任司祭ならびに兼任をしている一関教会、千厩教会では、東京から浜尾実氏を招いて教育講演会を催した。

2月16日午前は千厩町農村労働者センター



を会場に、町民約三百人に対して。同日夜は一関教会で信徒を対象に。17日午前は一関愛心幼稚園の父母約二百五十人に対して、「あすへの心」と題して話した。かつて東宮侍従として皇太子教育に携った経験から、エピソードを交えての話はきわめて好評であった。

第二回N・F・P研修会

さる2月7日午前、仙台元寺小路教会信徒館で、オタワ愛徳修道女会のシスター熊谷を講師に迎えて、第二回N・F・P研修会を行った。雪の降るきびしい寒さをもいとわず、子供づれの主婦や青年たちなど20人が出席した。聖書に基づいた結婚の理念から始まり、数種の受胎調節の特徴について大まかに説明した。今後は一か月に一回、数回にわたってそれらを詳しく説明することとした。

次回は3月6日(火)午前10時から、元寺小路教会の信徒館で「粘液法」について研修する予定。多くの方が参加するようのぞんでいる。なお今回より元寺小路教会が主催。連絡さき

大槻千あき 〇二二四五―三―一二三〇

新村 碩子 〇二二二―42―〇五三九

寄稿のお願い

教区報のために、信者の皆さんの寄稿をお願いします。とくに、信仰体験記、入信記などを、六百字位でどうぞ。締切り日なし。

送先 仙台市本町1の2の12教区事務所

カル1新教皇大使来仙

第2回聖書美術展に



仙台YBU創立15周年を記念して行われる第2回聖書美術展に、昨秋着任した教皇大使カル1大司教が初めて来仙する。聖書美術展は4月1日から8日まで、仙台市民会館展示ホールで催されるが、大使は4月1日午前11時のテープカットに出席する。これはかねて聖書美術展に出席を約束していた前教皇大使ガスパリ大司教が急逝されたため、YBU館長ジョリコール神父の願いに快く応じられたもの。公式の教区訪問ではないが、カナダ人の大使にとって、カナダ人司祭、修道女の多い仙台教区の訪問は楽しいものになりそう。

寒風の中 市内を行進

仙台キリシタン殉教祭



仙塩地区教会代表者合同会議の世話で、今年も仙台キリシタン殉教祭が、2月19日午後1時から行われた。例年になく寒さがつづいたが、当日は久しぶりの好天。約四百人の信徒が広瀬川大橋の殉教者像の前に集まった。殉教賛歌「おおしくも」で開会、ルカ福音書の朗読、仙台キリシタン殉教録の朗読のあと、八木山教会主任司祭クルノワイエ神父が説教。カルワリオ神父と8人の信徒は広瀬川で殉教したが、私どもにとって殉教の地は生活の場そのもの、殉教をも辞さない信仰生活

をすべきだと全員を励ました。

今年は例年とは逆に、行進は殉教者像より元寺小路教会に向って。青葉通りから一番町と市内の目抜き通りを、聖歌、祈りのうちにあるき通した。そして道ゆく人々に、仙台での殉教の事実を訴えた。行進には佐藤千敬司教や多くの司祭、修道女、仙塩8教会の信徒が参加した。

行進の終着地、元寺小路教会では午後2時すぎから佐藤司教による殉教のミサがさざげられた。今年はずいぶん特別聖年にあたり、殉教祭もまた特別聖年の行事として行われ、参加者は特別聖年の全免償の恵みを受けた。

山内強著「会津のキリシタン」

心血をそそいで完成する

山内強氏は会津坂下町に住む小・中学校長を歴任した教育者、また郷土史家。郷土史研究を進めてゆくうち、キリシタンとのかかわりを強く感じて、会津のキリシタン研究に没頭された。文字通り心血を注いだ最終原稿を見とどけるように、2月はじめ七十六歳の生涯を終えた。夫人イ子さんは古くからの信者だが、これが奇縁となり、また夫人の深い祈りで洗礼を受けることになった。

会津のキリシタンは、キリシタン大名レオ蒲生氏郷以来のものであり、山内氏は15年間、足であるいてその痕跡をひろい集めた。その強みが本書の随所に見られ、佐藤千敬司教が推薦の筆をとっている。

川村神学生、修道会に移籍

仙台教区神学生として、すでに助祭に叙階され、4月に司祭叙階を予定していた川村英成神学生(大湊教会出身)は、このほどベネディクト修道会に入会することになり教区籍を離れた。かねて修道生活を熱望していた川村神学生は神学校上長者、佐藤司教と話し合い、司教の許可を得て修道会に入会を認められたもの。教区としては残念であるが、同じ司祭への道をあゆむものとして、今後の大成を心から祈るようししよう。またこの機会にあらためて教区司祭誕生の困難さを認識し、教区司祭召命の祈りを熱心にしよう。

マリア・モニカ、永久保君枝



平教会カテキスタ永久保君枝さんは、1月27日教会近くで交通事故にあい、人事不省のまま2月2日午後8時10分に死去。60歳。

昭和24年草創期の平教会でグローロ神父から受洗。信仰の手柄を見込まれて27年カテキスタになり、32年間主任司祭を助けて要理教育、信徒指導、病院や家庭訪問、教会と幼稚園の事務など休みなく働かれた。その手柄は誰からも好かれ、かけがえのない人だった。葬儀ミサは2月4日午後1時から平教会で行われ、主任司祭グローロ神父、湯本教会ラローズ神父、小名浜教会モレン神父、ドミニコ会管区長ノレ神父、ボーリウ神父の共同司式で永遠の安息を祈った。その後遺骨は平市の川瀬教会墓地に埋葬された。

新教会法解説 ③

結婚についての改正点

安井 光雄神父

ご聖体拝領について改まったことがある。それは、自分の参加したミサ中であるならば、毎日のミサであっても二回は聖体拝領ができる。ただ三回はできない。今までは結婚式とか誓願式といった特定の場合だけミサ中ならば二度できた。しかしそういう条件はなくなつた。ミサ以外の拝領は一度だけできる。

結婚は全生涯のもの

結婚については改正されたことがいくつかある。昔のように第一目的とか第二目的と段階づけをしないで、「男女が、相互に、全生涯にわたる生活共同体をつくるために婚姻の誓約は、その本性上、夫婦の善と子の出産および教育に向けられている」(一〇五五条)といつて、一生生き方を共にした夫婦愛を強調している。したがつてまた、昔の契約という語でなく、実際に実行するという意味で誓約といつている。また、昔は肉体に対する権利の授受といつていたが、今度は、双方の全人格の授受といつている。

結婚の準備

結婚への準備は非常に大切で、子供の時から成長度に応じて教育しなければならぬものである。結婚の手続についての新规定がある。手続担当の主任司祭は、原則として、当

事者の住所・準住所。一か月間の滞在地の主任司祭であり、どこにも住所を持たず現在放浪中の住所不定者は、現在いる場所の主任司祭である(一一一五条)。そして男子と女子の住所(準住所)が異なる場合、結婚する資格があるか、また適法であるかを調査するのは、どちらの主任司祭によつて行なわれてもよいことになつた。

手続担当の司祭

この手続担当の司祭とは婚姻に立ち会う権利を有する主任司祭のことであるが、昔は、原則として女子の側の主任司祭と決められていたが、新法では上述のようにどちらの主任司祭でもよいことに改まった。結婚式の場所は、どちらかの住所または準住所の小教区の教会である。ただし、司教または主任司祭の許可があれば他の場所でもできる(同条)。もちろん、当事者の一方がカトリックで他方が非カトリックであるときは、カトリック側の主任司祭が調査を行うべきである。

本来の担当司祭以外の他の司祭が、結婚の手続を行うときは、その担当固有の主任司祭と連絡をとり、その許可を受けなければならぬ。他の主任司祭が調査をした場合、その司祭は、真正の書類で、その調査の結果を、婚姻に立ち会う主任司祭に送付しなければならぬことになつている(一〇七〇条)。



小野神父さんの葬儀のため、遺された住所録を見ていた。その中のひとつの名前に、私(三浦神父)は胸が熱くなつた。「韓国大邱教区補佐主教李文熙」

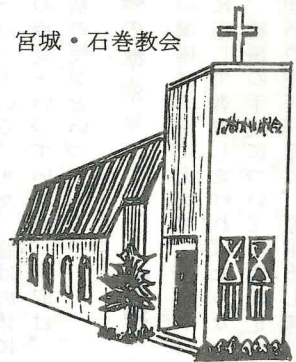
以前、カトリック新聞在任中、友人の韓国人神父の招待で訪韓した。彼が大邱教区出身であると知って、私は昭和17年に大邱主教となつた早坂久兵衛主教の墓のありかを聞いた。そして早坂主教の墓が大邱主教館の構内にあると知り、さっそく墓参りをし、墓前で李主教と一緒に写した写真を添えて小野神父さんに報告した。司祭生活の第一歩を豊屋町教会で、早坂久兵衛神父の助任として過したことを知っていたからである。

その後、小野神父さんは島田神父さんや、早坂家の人々と大邱に墓参したというのをうかがつた。李主教との文通はおそらく、それ以来のことだろう。

この事実、四十年も昔に助任司祭として仕えた早坂久兵衛神父に寄せる、小野神父さんの思いを物語るものにほかならない。私は小野神父さんの律義さ、義理、人情を垣間見せたものとして、胸の熱くなる思いであつた。いまごろは天国で、主任と助任が再会しているにちがいない。

おらが教会 (41)

宮城・石巻教会



今から丁度三百七十年前の慶長18年9月15日(一六一三年10月28日)、満月がこうこうと輝く午前2時ごろ、一隻の帆船が陸からの風を帆にいつばいはらんで、満潮の湾口から静かにすべり出した。

船の名前はサン・ファン・パブテスタ号。遠くローマを目指して陸前国牡鹿半島の月浦から出帆した。この船には、仙台藩主・伊達政宗がローマ教皇バウロ五世にあてた書状をたずさえている支倉六右衛門常長と、その案内役をつとめるフランシスコ修道会の司祭・ルイス・ソテロ神父など約二百人が乗っていた。使節一行は二年後の一六一五年11月3日、バチカン宮殿でバウロ五世に謁見、政宗よりの書状を呈上して使節の大任を果した。これは日本の歴史上特筆される出来事で、日本キリシタン史に大書されている。

この南欧遣使壮途の地「月浦」がある宮城県石巻市の丘、南罫山に立っているのが、わが石巻カトリック教会である。

すばらしい歴史的な地にある教会として

比較的新しく、正式に小教区として誕生したのは昭和25年である。初代主任司祭はステファノ小野忠亮神父。当初の石巻教会の聖堂は、市内本町にあった。明治時代に建てられた見事な洋風木造二階建て、石巻港の回漕海運はなやかなりし頃の日本郵船石巻出張所の建物を譲り受けたもの。昭和26年4月、当時の仙台教区長ミカエル浦川和三郎司教様の司式で献堂式を行い、被昇天の聖母マリアに捧げられた。二年後の昭和28年、石巻市初の公認私立幼稚園として、石巻カトリック幼稚園を開設した。昭和32年4月1日に二代目の主任司祭として、ステファノ斎藤石雄神父が着任した。着任早々に、石巻電報電話局の局舎新築敷地拡張のため、聖堂移築の大事業を行うことになった。昭和33年の秋、現在地である南罫山の一角、泉町三丁目2の17に聖堂と幼稚園を新築、当時の教区長小林有方司教様によって献堂式と幼稚園落成式を行った。

現在の主任司祭は三代目で、昭和45年4月に着任された深沢豊治神父。昨年は幼稚園を学校法人化して、近代的な園舎を新築した。この深沢神父様、実は石巻カトリック教会の本当の初代主任司祭?であるかも……。戦後の昭和21年、石巻市内の病院でカトリック研究会が生まれた。現在の信徒会長佐藤富三郎氏夫人たまきさんを中心に、今は故人となられた近江清さん、初代信徒会長の阿部徳三さんらが参加した。この研究会に片道だけで二時間もかかる仙石線の電車に乗って、公教要理を教えるに通われたのが、当時元寺小路教会主任司祭の深沢神父様だった。

先日お亡くなりになった小野神父様が居られた本町の草創時代は、戦後の物珍しさも手伝ってか、若者たちがどっと集まった。求道者の多い青年姉妹会は一大勢力をつくり、市民合唱団の母体となり、市民クリスマスを主催した。教会のポイスカウトも小野神父様の主唱により誕生した。小教区内の矢本町の自衛隊松島基地には米軍キャンプが併設しており、小野神父様はミサ後、いつも迎えのジープに乗って松島基地へ向かう日課になり、多忙だった。しかし米軍兵士の献金は、草創時代の石巻教会の財政をうるおした。

二代目斎藤神父様、三代目深沢神父様の時代を経るにしがたい、信者も増え現在は約二百人。壮年会を柱に、近年は婦人会の活躍が目ざましい。また求道者もあって神父様をよこばせている。幼稚園舎の新築を機会に、次は聖堂と司祭館の新築が信徒会の一大目標として設定されて、建設資金の基となる「種銭」づくりがさる昭和五十六年に始まった。「新聖堂建設基金委員会」の発足がそれである。



(亀山 幸一)

【編集後記】

今年、だいぶきびしい寒さがつづいた。もうそろそろ早春の気配がーと待ち遠しいが、皆さまでどうぞおからだお大事に。年度末ということで、なにかと心いそがしい。その底にはやはり、春になつての新しい出発の希望がある。いまはじっくりとその力を貯えるとき。四旬節は霊的力をたくわえる恰好のときだろ。

(M)